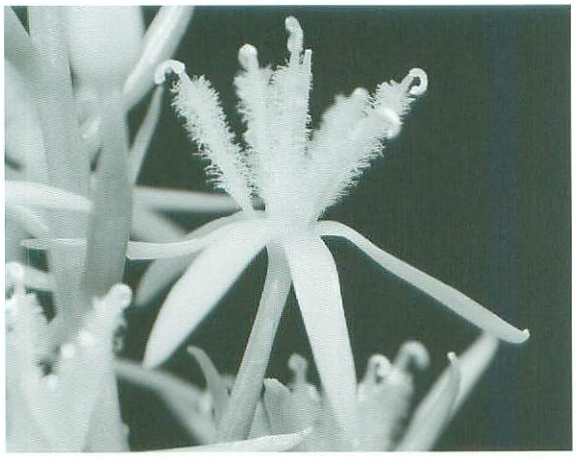
尾瀬のミニ観察（2）

－キンコウカ－
（花期：７月上旬～８月上旬）

昆虫をちょっとだます花だ。

この花には蜜がなく、花粉を運ぶマルハナバチやハナアブへの報酬は花粉だけ。花粉は昆虫にとって蛋白質に富んだ貴重な食品だが、蜜とは違ってその再生産はできない。花は花粉がなくなっても昆虫には来てもらいたいので、雄しべに花粉のような肌触りの、金色の細かい毛を沢山生やして「花粉がまだあるよ」と昆虫をだます。この花に出会ったら虫メガネで、昆虫を誘う花の工夫を、是非見てください。（田中　肇）



「今月の表紙」

熊沢田代と燧ヶ岳

VOL. 6　2008.09

目　次

01　副理事長あいさつ
尾瀬から考える明日
～自然と人の共生のヒント～

02　リレーエッセイ
拠水林の姿と樹種構成の違い
（土の中からなぞを解く）

04　エッセイ　尾瀬好日
私と娘と尾瀬
風の色、花の言葉をききながら

06　現地情報
原をわたる風だより
おこじょだより

08　連載コラム
『尾瀬の山々に抱かれた曲輪製造』
『大清水を飲みにきらっしゃい！！』

10　トピックスTOPIX
世界に向けて情報発信を
～尾瀬国立公園記念国際シンポジウム～

11　尾瀬ボランティア情報
イベント情報

12　尾瀬保護財団からのお知らせ
寄付のお願い
「友の会」コーナー

尾瀬から考える明日
～自然と人の共生のヒント～

財団法人尾瀬保護財団
副理事長　清水　正孝

「尾瀬サミット２００８」が8月31日に福島県桧枝岐村で開催され、同日、私はサミットに先立って開かれた尾瀬保護財団の理事会において、副理事長に選任されました。前任の勝俣と同様に、何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、平成17年のラムサール条約登録に続き、昨年8月30日には、かねてからの念願であった「尾瀬国立公園」が誕生し、尾瀬には明るい話題が続いております。特に、既存の国立公園からの分離・独立という前例のない英断がなされた背景には、尾瀬の自然の持つ価値はもちろん、これまで地元の皆さま始め関係者の方々により行われてきた自然保護活動に対する評価、そしてこれからの取り組みに対する期待があったことは言うまでもありません。長年尾瀬の保護活動の一端を担ってきた東京電力と致しましても、喜びの中に身の引き締まる思いをかみしめております。

先日、尾瀬国立公園誕生を記念した国際シンポジウムが開催されました。それを機に、改めてわが国、そして世界の国立公園制度が見直され、そこにはそれぞれの国の自然観が反映されていることを感じました。ヨーロッパ諸国や韓国と同様、わが国の採る「地域性公園制度」は、土地所有にかかわらず区域を指定し、開発規制をかけて自然を守る制度であるため、日本の国立公園面積の約4分の1は私有地となっています。土地の所有者、特にそこに住む方々にある程度の負担がかかることは避けられない中で、わが国の国立公園が70年以上、この制度のもとに存続してきた背景には、「自然はみんなの共有財産」という思想があったのではないでしょうか。権利意識が強まる一方の現在、こうした日本人が古来より抱いていた自然観に触れ、心洗われる思いが致しました。

さらに尾瀬では、多くの関係者の自発的な取り組みでその自然が守られてきた歴史があります。「誰がやるべき」ではなく「できる立場の者が、できることを、できる限りやる」という姿勢は、日本の他の国立公園にとどまらず、世界、特に狭い国土に多くの人が暮らすアジア諸国に、新たな視点を投げかけることができる、さらには、国立公園制度だけでなく、地球温暖化など様々な人と自然の共生に関わる問題解決の糸口となり得ると確信致しました。こうした点からも、尾瀬保護財団の活動が今後もさらに発展していくことに微力ながら貢献していきたい、また、皆さまのご協力を仰ぎたいと考えております。

尾瀬の自然には人を動かす力があります。この自然に触れれば、それを守ろう、大切にしようという気持ちが、まさに「自然と」湧いてきます。多くの方が尾瀬の自然と触れ、自然の大切さ、優しさ、有り難さを感じて頂くことが、自然保護の第一歩になることを確信して、私のご挨拶と代えさせて頂きます。

リレーエッセイ

拠水林の姿と樹種構成の違い（土の中からなぞを解く）

谷本　丈夫

尾瀬ヶ原に流入する河川の多くには、流れに沿って発達する森林が見られます(写真1)。これらの森林は、水の流れに沿って成立することから「拠水林」と呼ばれています。貧栄養で、強酸性を示す泥炭湿原内では樹木の生育はできません。河川によって周辺山地から運ばれた肥料分になる有機物や土壌が湿原内に運ばれ、自然堤防と呼ばれる地形をつくり、そこに木が育つことになります。これが拠水林のできる理由とされています。しかし、この説明だけでは湿原内を流れる河川における拠水林は、皆同じ樹種で構成されていることになります。

川上川が尾瀬ヶ原湿原に流入する山ノ鼻地域の拠水林にはカラマツが多く混じっています。ミズバショウの撮影ポイントで有名な下ノ大堀川には拠水林が見られません。また、沼尻川にはカラマツを含まない広葉樹の拠水林が発達し、六兵衛堀ではカンバ類を中心とした拠水林となっています。下ノ大堀川とヨッピ川の出会い付近では矮性化したヤチダモ林やカラコギカエデ林が発達しています。また、湿原の小高くなった丘状地にはシラカンバが、単木もしくは数本叢立ちしているのが観察されます。このようなシラカンバ林は下ノ大堀川を挟んで一段高くなった場所を結ぶように並んでいるようです。これらは、大昔の自然堤防の跡である可能性が高いのです。このように尾瀬ヶ原の拠水林は、成立している場所によって樹種構成、群落構造が異なっています。

第三次尾瀬総合学術調査の際に、日頃疑問に思っていた拠水林の成り立ちについて調査することが出来ました。環境省、文化庁の許可を得て、各拠水林において土壌断面をつくり、それぞれの断面構造を比較したところ、カラマツ林の土壌は、下層部に石礫が堆積し、その上に細砂や粘土が堆積する構造となっていました(写真2)。また、沼尻川の拠水林では粘土や細砂のみが堆積しており、下ノ大堀川とヨッピ川の出会いのヤチダモ林では、還元された灰緑色のグライ土壌と呼ばれる構造となっていました。

では、どうして石礫が運ばれたり、細砂や粘土質の土壌が堆積したのか、次のなぞ解きを考えました。カラマツが多く、下層に石礫が堆積した河川、川上川、猫又川などでは集水面積が大きく、山地から湿原までの距離が比較的短いため、有機物や石礫を含んだ土壌の運搬が激しかった。これに対し沼尻川は、集水面積としては尾瀬沼付近までを含み大面積ですが、燧ヶ岳の山麓緩斜面に石礫を堆積し、湿原内では流れが緩やかになり、細砂や粘土質の土壌のみを運び堆積させている。このため、竜宮付近の沼尻川では石礫層が見られない。ひょっとすると、さらに深く掘れば石礫層が出てくるかもしれません。下ノ大堀川とヨッピ川の出会い付近では、両河川が合流し、流れに淀みができ酸素不足からグライ土壌が形成され、それに耐えるヤチダモ林となっているのでしょう。また、下ノ大堀川では、集水面積が小さく土砂の堆積が少ないことになります。

尾瀬ヶ原全体は盆地地形で周囲は山地となっています。山地から湿原への移行部では、ケイズル沢などのように扇状地が発達し、土石流の堆積の仕方で、ハルニレ林など多様な森林が見られます。新緑と紅葉時期にはそれぞれの樹種の芽吹きや紅葉の色が異なり、その違いを容易に観察できます。また、湿原と山地の間ではレンゲツツジ、ズミなどの低木林が分布域を異に

しています。尾瀬ヶ原湿原はおよそ八千年の年月を掛けて発達したと言われていますが、山際や河川に近い泥炭湿原では、周囲の山地からの土石流の供給によって、泥炭湿原と拠水林がせめぎ合っていたのです(写真3)。その様子は土の中に記録されており、尾瀬ヶ原湿原成立までの悠久の時間と環境変動が、今日の拠水林の姿をつくりだしたのです。

筆者紹介

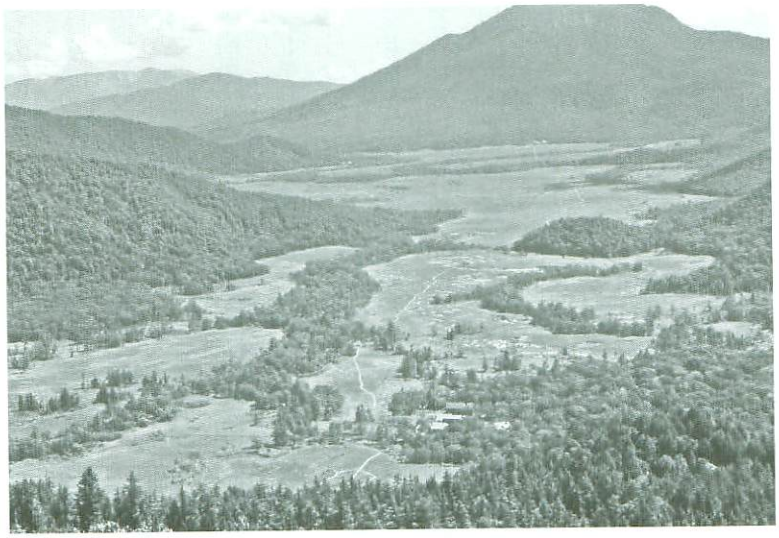
谷本丈夫（たにもと たけお）

宇都宮大学名誉教授

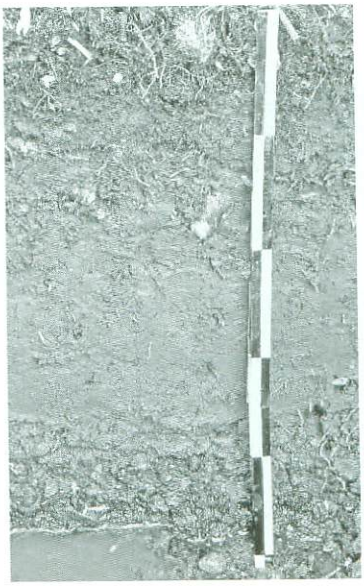
専門は育林学・森林生態学

第三次尾瀬総合学術調査以来、尾瀬の植生変化を特にシカの食害との関連で継続調査、尾瀬には植物の生育期に、赤白の測量ポールを持って月2回以上通っている。

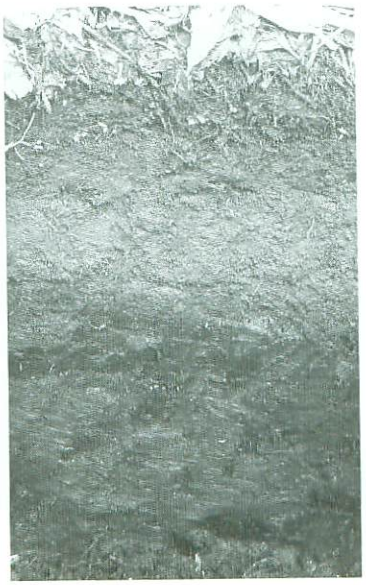
著書は「大都会につくられた森　明治神宮に学ぶ(共著)」第一プラニング、「森の時間に学ぶ森つくり」全国森林普及協会、「広葉樹施業の生態学」創文など多数



▲写真1　至仏山から見た尾瀬ケ原湿原の拠水林



▶写真2
カラマツ林の土壌断面
（下層に石礫層が存在する）



▶写真3
上ノ大堀川の自然堤防にあるシラカンバ林
（下層に発達した泥炭層を持ち、上層部は細砂・粘土層に覆われている。土砂の流入の後、泥炭の発達が止まり、樹林化した。）

エッセイ 尾瀬好日

新潟県自然観察指導員の会
会長　加瀬由紀子

「私と娘と尾瀬」

初めて尾瀬を訪れたのは、娘が小学校1年、つまり、22年前の秋でした。その前年の夏、幼稚園の娘に登山靴をプレゼントし、新潟の守門岳という1500メートルほどの山を彼女とゆっくり登り、山上の湿原やヒメサユリに感激して、次は尾瀬に行こうと計画したのです。というのも私は学生時代、山岳部（OBに植村直巳氏）に所属していたことがあり、登山とは、バリエーションルートをいかに速く征服するか、だと思っていたので、沼山峠から1時間ほどで行ける楽園は、まさにカルチャーショックでした。

守門岳から下山するとすぐに新潟県の自然観察会（巻機山麓）に参加、自然観察指導員の資格をとり、尾瀬に臨みました。尾瀬沼を午後2時に出発、テント、寝袋、娘の荷物も担いで、「疲れた、歩けない」という娘の手を引きながら、見晴キャンプ場に到着したときは暗くなりかけていました。テント設営もそこそこに朝まで二人死んだように眠り、翌日は平滑、三条ノ滝を巡り燧裏林道を経て、娘をなだめながら御池まで歩いたことも、なつかしい思い出です。翌年の秋には、初めて二人で燧ケ岳に登りました。娘は、もう荷物をしっかり担いで歩くようになっていました。

その後、新潟県自然観察指導員の会の幹部からの薦めもあって環境庁（現：環境省）尾瀬パークボランティアに応募、講習の2年後、尾瀬沼ビジターセンターで観察会講師、スライドレクチャー・デビューすることになりました。14年前のことです。娘は夏休みや連休に一緒に尾瀬に入山、山小屋やテントに泊まりながら私のボランティア活動を手伝ってくれました。中学2年時にその様子を「わたしの主張」弁論大会で「わたしの尾瀬」として披露、県大会で優勝し、全国大会では残念ながら選外でした。観察会の一番最後尾に、にっこりしながら付いてくる彼女は、私にとってもボランティア活動の心強い味方でした。反面、「声が聞き取れなかった」「語尾が不明」「スライドを早く廻しすぎ」など、厳しい批評家でもありました。尾瀬沼ヒュッテ裏の幕営場のテントで私の活動の合間に宿題をしたり、沼のほとりで夕焼けに浮かび上がる皿伏山を眺めたり、山荘気分で過ごした夏休みは彼女の人生に大きな潤いを与えたと思っております。

昨年は、御池～沼山間をマラソンしたり、ナデッ窪往復燧ケ岳登山をスピード敢行したりと、もはや私の体力とは比ぶべくもない彼女です。トライアスロンの選手として各地の大会に出場の合間にも、「この次の活動はいつ？」と私との尾瀬同行を、今も楽しみにしているのを嬉しく思います。

▲娘と燧ケ岳を下山して【1987年】

▲尾瀬沼ビジタセンター前で　朝の自然観察会【1999年】
（中央帽子が筆者）

エッセイ
尾瀬好日

尾瀬ボランティア
長友　重行（NO.875）

「風の色、花の言葉をききながら」

「こんちわ～」

「案内ですか？」

「ええ、10人程連れてね。これから沼山峠まで行くんですよ。ボランティアをしているのです。」

「そうですか。ボランティアで案内、ですか」

「自然解説だけでなく、自然保護についても話し、理解してもらう。自分自身のブラッシュアップにもなりますしね。いいですよ～。」

「そうですか。私も社会貢献というと大げさですが、何かと思っているところなんです。」

その日も沼尻休憩所で一休みしている時、たまたま話をしたK氏とのこんなやりとりが、私が尾瀬ボランティアに参加する大きなきっかけになりました。おそらくこの出会いが無ければ他の地域で、別のボランティアをしていたかもしれません。出会いの〝冥利〟を感じた瞬間でした。

尾瀬国立公園が29番目の国立公園として誕生した年に、ボランティアに登録出来た事は私にとって一つの記念すべき出来事ですし、ある種の因縁を感じざるを得ません。

今年の活動は、至仏山東面の登山道柵立て、山の鼻ビジターセンターでのボランティアからスタートしました。登山道柵立てでは、杭を打ちロープを張り、そのロープが貴重な植生を守るかと思うと、直登してきた汗も息切れも忘れ、すがすがしい気分と満足感に浸ることが出来ました。

自らが感動し吸収したすばらしい、輝く自然の色で染めた糸を縦糸に、また自然保護を横糸として織り込んだ、自作の〝尾瀬錦〟を訪れる人達に披露したいと思います。この布を織り、伝えることにボランティアとしての責任、醍醐味と満足感があると今考えています。そして肩の力を抜いて、〝楽しく活動すること〟が、ボランティアを長く続ける一つのコツではないかと思っているところです。

「午後3時に鳩待峠に集合なのですが、どこを見たらよいかしら」

「水芭蕉はどのあたりがきれいですか」

「山ノ鼻へ来る途中見た、白い花は何という名前？」

などなど、ビジターセンターで応対しているとこんな質問が多いのに改めて驚きました。

残り時間をざっと計算して、「この時間だったら、研究見本園を見たらどうですか。40分から1時間程で回れますよ。比較的人も少ないし。」と伝え、「次回はウイークデーに来てくださいね。ゆっくりと静かな尾瀬が見られますから」と一言付け加えます。仕事の関係などで土・日しか日程が取れないという方もいらっしゃるでしょう。でもせっかく尾瀬に来るのですから、時間をかけて尾瀬の自然に触れて欲しいのです。

尾瀬の自然、花や木々、水に棲む生き物、鳥、皆生きています。命があります。その命を大切にすることが、私は自然保護の原点と考えています。「きれいな花ね！」と感嘆すると同時に、〝その花も生きている、命がある〟、だから美しいのだということを思い出して欲しいのです。これからのボランティア活動を通して、このことを是非伝えていきたいと今思っているところです。

▲山の鼻ビジターセンターでの活動風景

現地情報

原をわたる風だより

企画展を開催しました

7月19日～8月31日の夏休み期間中に企画展を開催しました。

今回の企画展は次の4つのテーマに分け、展示を実施しました。

館内に再現した湿原に実際に踏み込んでもらい、踏み跡が元に戻らないことから、湿原の繊細さと貴重さを学ぶもの。

▲尾瀬の湿原を再現した展示

尾瀬国立公園の概要と生きもの同士のつながりを視覚的、クイズ感覚で紹介するもの。

公衆トイレ裏側の合併処理浄化槽を模型で再現し、水が浄化される過程を擬似体験するもの。

▲水がきれいになる様子に驚く子ども

ボッカ（歩荷）さんが実際に使用している背負子（しょいこ）を担ぎ、尾瀬を支える人々の苦労を体験するもの。

▲これであなたもボッカさん

体験型中心の展示は特に子どもの関心を引きつけたようです。

展示作成にあたり苦労したのは、いかに来館者の方に実際に近い体験をして、理解していただけるかという点でした。

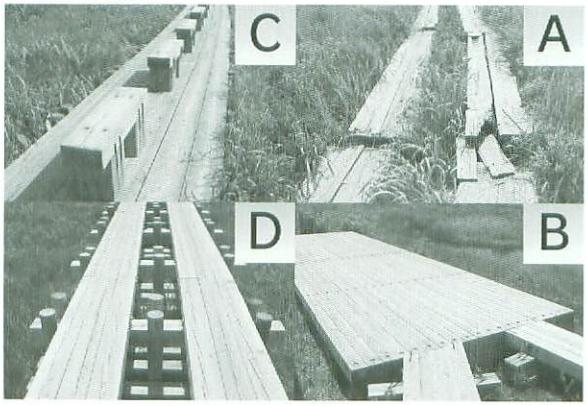
企画展は終了しましたが、一部の展示は引き続きご覧いただけます。

今後も、尾瀬の自然を楽しみながら理解できる展示を作成していきます。お楽しみに。

足下注意!!（縁の下の力持ち）～木道の話～

尾瀬ヶ原を代表する景観として、湿原と木道を思い浮かべる方も多いのではないでしょうか？

さて、次の写真（A～D）はそれぞれどこの木道でしょう？（答えはこのコーナーの最後にあります）



木道は意外に傷みやすく、おおよそ8年～10年程度で架け替えをしなくてはなりません。また、木道は国産のカラマツ材を用いており、尾瀬の外で伐採されたものを、ヘリコプターで運んでいます。木道の設置・改修作業はすべて手作業で行われており、簡単な補修はビジターセンター職員が行っています。架け替えをした後の古い木道は、環境資源の有効活用として、さまざまな形で再利用されています。例えば、この機関誌も「尾瀬の木道をリサイクルした再生紙」を使用しています。

一見同じように見える木道ですが、最近設置された木道の多くは、工夫を凝らして改修されています。例えば、クマ対策で高架化された木道（東電小屋付近）や、木道の間にベンチを設置している箇所もあります。

▲木道補修作業の様子

今度尾瀬に来る時は、足下の木道にも目を向けてみてはいかがでしょうか？

答え

A. 牛首～下ノ大堀　古い木道

B. 竜宮～六兵衛堀　改修テラス

C. 牛首～ヨッピ吊橋間
　新設ベンチ（職員の間ではカップルベンチと密かに呼んでいます）

D. 竜宮～下ノ大堀　昨年度新設木道

（大林　千恵・吉岡　昌平・秋山恵美子）

現地情報

おこじょだより 2008年秋

登山口ではなく山の中にある尾瀬沼ビジターセンターの役割は一言で言うと『尾瀬を訪れた皆さんに安全に尾瀬を楽しんでもらうこと』だと思います。尾瀬は山岳地帯です。病院がないのは当たり前ですが、病気やけがをしても救急車も来ることができません。緊急の場合、防災ヘリが飛んできますが、夜間や荒天時は飛ぶことができず、担架搬送となります。体調を整え、その時の天気や季節に合わせた装備で尾瀬にいらしていただきたいと思います。情報を十分集めて、しっかり準備をしてお越しください。

尾瀬を楽しんでもらうという点では、昨年は『リニューアル』というテーマで様々な展示を行ってきました。今年もその流れは変わっていません。職員みんなで意見を出し合い、一味違った手作りの展示を作成しています。この展示は、春にオープンしたらそのまま秋まで同じではなく、常に更新しています。春にビジターセンターを訪れた人が、秋に再びビジターセンターに訪れても決して飽きさせることはありません。いつでも新鮮な情報と新鮮な展示で皆さんをお待ちしております。日々変化し、成長し続ける尾瀬沼ビジターセンターに是非いらしてください。

（赤塚　淳一）

木道で子育て ～穴を開けたのは誰？～

木道の表面に開いている小さな穴、気になったことありませんか？足元をよく見て歩くと、直径3～4ミリくらいの穴が見つかります。ちょっと古くなった木道に多く開いているようです。

何となく「虫っぽいなぁ…」と、思っていたのですが、ついに昨年の9月14日、その正体を明らかにしました。

木道の上を何気なく歩いていると、木道の上に木くずが盛り上がっているのです。ふぅーと、木くずを吹き飛ばすと直径4ミリ程度の穴が空いていました。「なんだ？」期待に胸が膨らみます。観察したい気持ちは山々ですが、仕事中…。場所をしっかりと確認して、ビジターセンターに戻りました。

さて、待ちに待った昼休み。昼食をかき込み、いざ出陣。穴の近くで少し待つと、体長1センチ程の虫が飛んできました。私を警戒して穴に近づけない様子なので、少し離れていると「中に入ったぁ」しかも、よくよく見るとハエを抱えているようです。

写真を見ながら調べてみると、ギングチバチの仲間であることが分かりました。朽木に穴を開けて、幼虫のためにハナアブ類やハナバエ類を狩るそうです。

人間にとって湿原を守る木道は、このハチにとっては子供を育てる家なのですね。また来年、この木道で育ったハチが、小さな穴を開ける姿に出会いたいものです。

（佐藤　美幸）

新天地へ・見晴

この仕事に就いてはや3年目、やっていて良かったと感じる時はいくつかありますが、そのひとつにシーズンを通して尾瀬を見られる事があります。ほとんどの方は、計画を立て時間とお金をかけてこの尾瀬へと足を運び、断片的な尾瀬を見ることしかできません。今年の見晴休憩所では、展示のひとつとして尾瀬ヶ原を定点観察しています。これは二十四節気になぞり、その時その時の情景を、コメントを交えて記録しています。皆様にも、その変化をご覧頂ければと思います。

（西口　俊一）

沼人（ぬもうど）の本音

尾瀬沼のほとりで暮らす尾瀬沼人、通称沼人たちの本音。第二回目のテーマは『好きな場所は？』です。

三本カラマツの手前の橋

●大江川のニジマス、アブラハヤ、フナ、イワナなどをボーッと見てると時間を忘れますよ（Tさん）

アヤメ平

●稜線がきれいだから（Aさん）

三平下

●そこから見える尾瀬沼と燧ケ岳がきれいだから（Hさん）

大江湿原の荷鞍山が見える木道上

●ちょっと歩いて前後すると荷鞍山が見えたり見えなかったりするのが面白い（Sさん）

長蔵小屋無料休憩所の裏手

●燧ケ岳も尾瀬沼も三本カラマツもきれいに見えるので（Iさん）

風のない朝は逆さ燧も見られる素敵な場所です。

変わった答えは、

尾瀬沼北岸と山小屋の女子部屋

●北岸は地味だから好き。女子部屋は、ねぇ…（Kさん）ということですが、ねぇといわれても…。

最後は、

残雪期の長英新道、初夏の尾瀬ヶ原上田代と大清水平

●残雪期は笹に埋もれず森が明るく気分がいい。上田代は自分にとっての原風景。季節、鳥の声、空気感、すべて好き。（別のKさん）

自分で歩いて見つけたお気に入りの場所、皆さんも見つけに来ませんか？

（小山　抄子）

■連載コラム

『尾瀬の山々に抱かれた曲輪（まげわ）製造』

尾瀬から学ぶスローライフ

取材協力＝星　寛（福島県南会津郡檜枝岐村）

尾瀬国立公園の山々に抱かれるように位置する檜枝岐村。日本で最後に電灯がひかれたこの村には、山間の自然を活かした伝統食「山人料理」や、古くから伝わる民俗芸能である「檜枝岐歌舞伎」など、尾瀬だけでない様々な魅力を持っています。そんな檜枝岐の郷土品として忘れてはいけないのが曲輪（まげわ）と呼ばれる木工品です。今回は村内で唯一、曲輪製造を行っている星寛さんにお話を伺いました。

檜枝岐の曲輪製造の始まり

「私は昭和3年に檜枝岐村に生まれました。私が小学生の頃には祖父の亀吉が、水桶やせいろう（蒸し器）等の実用品を作っていたのを覚えています。当時は亀吉とその兄弟が中心となって作業を行っていましたが、せいろうは檜枝岐式といって、他とは違う構造をしていたようです」と、ご自宅の隣にある作業部屋で星さんが話し始めてくれました。

「水桶は1日中一所懸命に作業して9～10個しか作れませんでしたが、ある程度の数が仕上がると、品物を背負って引馬峠を越え、日光から来ていた仲買人と川俣温泉で待ち合わせて現金収入としました。その品物は日光で漆を塗って、日光メッツという名前で販売されていたようです。曲輪と呼ばれる現在のお弁当箱のようなものは戦後になってから作られ始めました」と星さん。当時の思い出を伺うと、「たくさんの品物を作るには、山からたくさんの木材を切り出してくる必要があります。民有地はごくわずかなため、国有林を切って逮捕された事もあったようです。そのときには村を代表して数名が逮捕され、会津若松の刑務所に服役したそうですが、その家族の生活は村民が協力して助けてあげていました」

▲「めさし」を使って曲げた板を縫い合わせる

原木の目利きから販売まで

星さんが曲輪製造業を継いだのは昭和37年の時だったそうです。

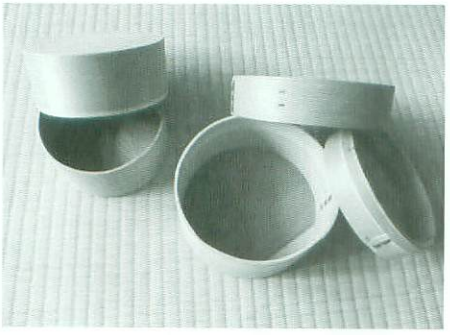
「私の父は村内でサンショウウオ捕りを生業としていましたので、私も昭和22年から始めました。山をひとりで歩くのが好きで、以来50年以上もサンショウウオ捕りをやってきましたが、冬はその仕事ができないため、曲輪製造を始めることにしたのです。曲輪製造は山歩きと異なり、ずっと屋内での作業となりますが、冬の檜枝岐村は雪深くて身動きがとれないので、ちょうど良かったかもしれません」と話す星さん。曲輪はどんな木で作られているのでしょうか。

「現在の檜枝岐村の曲輪は全てネズコ（クロベ）という木から作られています。トウヒやヒメコマツ等を試したこともありますが、材木を曲げた時に折れやすかったり、木目が無くて白っぽい仕上がりになり、買ってくれる方からも不人気でした。最近ではネズコも手に入りづらくなっており、方々を探しているような状況です」

唯一の曲輪職人として

現在、檜枝岐村で曲輪製造を行っているのは星さんひとりのみ。そのことを伺うと、

「やはり寂しいのが正直な気持ちですが、最近では地元小学生が村の文化を学ぶために曲輪作りに訪れてくれます。またこの仕事をやってみたいと言ってくれる方もいますが、これからの曲輪製造は同じ物ばかりを作るのではなく、自分が作りたいものを作り、いろいろな事にチャレンジする姿勢が大切だと思います」と、星さんは優しい笑顔を浮かべながら話してくれました。



▲出来上がった曲輪

▲曲輪の作り方を習いに来ていた檜枝岐小学校生と寛さん

星　寛（ゆたか）

（檜枝岐村1008）

■問合せ先

0241-75-2131

■連載コラム　『大清水を飲みにきらっしゃい！！』

続・山小屋主が語る尾瀬の秘話　取材協力＝大清水小屋（群馬県利根郡片品村）

大清水登山口は尾瀬の登山口として古くから利用されてきました。江戸時代には会津と上州とを結ぶ交易の道として、また戦前には近隣で栄えた金山の鉱夫たちが寝泊まりする場所として利用された歴史を持っています。そんな大清水で山小屋を営む大清水小屋の笠原吉雄さんにお話を伺いました。

大清水で生まれ育つ

「大清水小屋は昭和6年に、私の曾祖母である笠原わさが根羽沢金山の山師相手に宿泊業を始めたのがきっかけです。とは言え当時は名前の無い山小屋で、二代目で祖父の笠原浜吉の時に名前をとって『浜吉小屋』と呼ばれていました。『大清水小屋』の名前は父が跡を継いだ昭和31年になってからの事です」と、笠原さんは朝陽の射し込み始めた大清水小屋の部屋で、当時を思い出しながら話し始めてくれました。

「私は昭和31年にこの場所で生まれました。だから本籍もここにあるのですが、正式な地名は大清水ではなく、『大字戸倉字船ヶ原』といいます。船を浮かべられるような川も無いし、皿伏山の形と関係があるもしれません」と大清水生まれならではの話をしてくれた笠原さん。

「小学生時代は尾瀬沼に行ってポンポン船に乗ったり、物見山方面に30分程歩いた所にあったキャンプ場のお風呂に入るのが楽しみでした。そのお風呂には登山者の少ない昼間に行くのですが、ヘビが泳いでいることが多かったですね」

▲お祖父さんの簑が今でも小屋内に飾られる

山小屋主として感じること

笠原さんは25歳の時に大清水小屋で働き始め、39歳で跡を継いだそうです。山小屋主になってからの思い出を伺うと、

「私が小屋を継いだ頃は大清水登山口も盛っていて、朝早くから夜遅くまで仕事づくめでした。仕事よりも子どもに会えないのがつらかったですね」と笠原さん。

「つらいよりも楽しい事の方が多いですね。特にこの場所が好きで何度も訪れてくれる方と再会し、近況を話し合ったりするのが好きです。常連さんの中には父の代から来ている方もおります。大清水にはこの場所なりの良さを知っている方が何度も訪れています

▲大清水湿原の隣に建つ大清水小屋

大清水と

常連さんたちが大清水に何を求めてきているのか。それが知りたくてたずねると、様々な答えが返ってきた。

「大清水は車で来られる場所ですが、標高が約1200mの山間にあり、静かで涼しい場所です。そんな場所柄を知ってか、夏になると避暑に来る方もいます。そして何よりも大清水の水が好きで、毎週汲みに来る方もいるほどです。水量が豊富で枯れることがなく、尾瀬の水よりもまろやかなのが特徴です」と出されたお茶やコーヒーはすっきりとしていて、味わいのある美味しさでした。

「ここを通過する登山者を長い間見てきましたが、都会の忙しさを背負って入山する方が多いですね。尾瀬はあせる所ではなく、のんびりする所。大清水のお茶で一服するくらい『ゆっくりリズム』で歩いてもらいたいですね」と笠原さんは笑顔で大清水の魅力を語ってくれました。

▲大清水の清冽な水が小屋前を流れる

▲小屋前の笠原さん

大清水小屋
（戸倉船ヶ原906-3）

■問合わせ先
0278-58-7370
■宿泊料金
1泊2食　6,800円
■営業期間（例年）
4月下旬～11月上旬

世界に向けて情報発信を
～尾瀬国立公園記念国際シンポジウム～

7月18～20日に、尾瀬国立公園記念国際シンポジウム「みんなで支える新たな国立公園―尾瀬国立公園のめざすもの～地域との協調・協働による自然公園管理モデルの提案～」が尾瀬国立公園記念事業実行委員会主催により開催されました。

国際的な視点から尾瀬国立公園の管理運営のあり方について考えるため、それぞれ国立公園の管理運営に成果を上げている国から、アメリカのルーディー・ダレッサンドロさん(国立公園局国際協力専門官)、スコットランドのハミッシュ・トレンチさん(ケアンゴーム国立公園管理局遺産・土地管理代表)、インドネシアのバンバン・スプリヤント博士(グヌンハリムンサラク国立公園所長)、ニュージーランドのメイレイ・クリスティン・リム博士(国立ワイカト大学教授)の4名をパネリストとしてお招きしました。

▲ガイドさんの解説を聞くパネリストら

〈1日目〉

シンポジウムに先立ち、尾瀬の自然と尾瀬におけるエコツーリズムを海外のパネリストに体験してもらうための視察ツアーを2日間で実施。初日の18日はあいにくの雨でしたが、尾瀬ヶ原では牛首からヨシッ堀田代周辺のニッコウキスゲがまさに見頃を迎え、黄色く幻想的に煙る雨の中、ガイドによる自然解説や、野生動物対策などの公園管理方法についての説明を受けながら、架け替えたばかりの東電尾瀬橋を渡って赤田代へ。この晩は温泉小屋に宿泊、山小屋の皆さんの暖かいもてなしを受け、海外の方たちもリラックスした様子で尾瀬の夜を過ごしていました。

▲実行委員・パネリストらがシンポの成功を誓って記念撮影

〈2日目〉

翌日は天気も回復し、緑輝く白砂峠を越えて尾瀬沼へ。ビジターセンター周辺の施設見学の後は、沼山峠から最近人気上昇中の奥只見ルートを通って魚沼市へと抜けました。遊覧船やシルバーラインなど多彩な表情を見せる行程や、そこから垣間見える尾瀬の歴史や文化に、海外の方は大変興味を示し、尾瀬に対する理解を深めていました。

この日の夜は、折立温泉ホテルゆのたに荘で歓迎レセプションを開催。実行委員長の大澤正明群馬県知事が主催者を代表して「尾瀬は世界中のどの国の方々にも胸を張って自慢できる私たちの宝物。子ども達の世代に引き継いで行く方策について、シンポジウムでは皆様からのすばらしいヒントやアイデアを期待しています。」とあいさつ。実行委員である福島県知事、新潟県副知事、東京電力㈱社長らも出席し、地元の豊かな恵みを味わいながら、和やかに歓談が行われました。

〈3日目〉

最終日の20日はいよいよシンポジウム本番、新潟県魚沼市の小出郷文化会館で午前10時に開会。会場にはおよそ200人の聴衆が詰め掛け、熱心に耳を傾けました。

午前の部の基調報告では、環境省の関根達郎統括企画官が尾瀬国立公園誕生の経緯やその意義、これからの課題について説明した後、海外のパネリストが2日間の尾瀬視察の感想も交えながら自国の取り組みについて報告しました。

午後の部のパネルディスカッションでは、海外パネリスト4名に加え、環境省尾瀬自然保護官の藤田道男さん、東京電力㈱尾瀬保護活動担当の竹内純子さん、当財団の笛田浩行事務局長がパネリストとして参加。コーディネーターは横浜国立大学大学院の加藤峰夫教授が務め、入園料の是非、シカ対策、環境教育の充実、ブランドイメージの形成などの問題について活発な意見交換を行い、どの問題解決にも地域との連携が欠かせないことが改めて確認されました。

海外パネリストの共通意見として、尾瀬の管理運営について「観光よりも自然保護に重きを置いている点が素晴らしい」と高く評価する一方、国際的に認知されていない現状が挙げられ、公園内標識に英語表記をすること、インターネットにおける英語での情報発信、海外の国立公園との姉妹関係締結などの取り組みが提案されました。

▲総勢8名が熱心に意見交換

21世紀の新しい日本の国立公園として、世界に向けた情報発信をどのように進めるかを考えるきっかけとし、今後も情報交換を続けることを約束して3日間の幕を閉じました。

(詳細は後日報告書を作成し、希望者に配付します。)

尾瀬ボランティア情報

このコーナーは尾瀬ボランティアに登録されている方のためのページです。

●活動情報

各活動へ参加をご希望の方はメール、電話、FAXでご連絡ください。各活動の詳細は事務局へお問い合わせください。（スケジュール等は変更の場合があります。）

○ありがとう尾瀬清掃

アヤメ平コース

・日　時／9月15日(月・祝)9時～12時
・集　合／鳩待峠鳩待山荘前
・コース／鳩待峠～アヤメ平～富士見峠

燧ケ岳コース

・日　時／9月15日(月・祝)7時～15時
・集　合／御池駐車場燧裏林道登山口前
・コース／御池～俎嵓～尾瀬沼VC
※参加は体力に自信のある方のみです。

尾瀬ケ原コース

・日　時／10月13日(月・祝)9時～14時
・集　合／山の鼻ビジターセンター前
・コース／VC～ヨッピ吊橋～竜宮～VC

尾瀬沼コース

・日　時／10月13日(月・祝)9時～12時
・集　合／尾瀬沼ビジターセンター前
・コース／VC～沼尻～三平下～VC

○至仏山東面登山道踏込み防止柵撤去作業

・日　時／10月26日(日)9時30分～15時
・集　合／山の鼻ビジターセンター前
・内　容／森林限界付近～高天ヶ原休憩所上に設置した保護柵およびロープの撤去
・注意事項／降雪の可能性があります。
※参加は体力に自信のある方のみです。

●檜枝岐村の宿泊所の利用について

財団職員が拡張地域で活動するための宿泊所として、村から未利用施設の「老人憩いの家」をお借りしていますが、この施設はボランティアの方の活動の際にもご利用できますので、以下の注意事項を守ってご利用ください。

注意事項

・建物の場所は檜枝岐小・中学校グラウンドの南側。道路に面していないので、車は役場前の駐車場へ駐車。
・1階の大広間のみ使用可。寝具あり。
・電気、水道利用可。トイレ可。風呂不可。
・飲食可。火気厳禁。整理整頓。
・退去時電気、水道、ごみ、戸締まり確認。
・鍵は尾瀬檜枝岐温泉観光協会で管理。営業時間（8時30分～17時00分）内に借り受け。
・鍵の借用時に所定の使用簿に記入。
・鍵は最終退去者が責任をもって返却。複数で利用した場合は返却者を決めておく。
・営業時間外の鍵の返却方法は借用時に協会に確認。
・料金は無料。

イベント情報

第13回NHK「わたしの尾瀬」フォトコンテスト作品募集

四季折々、様々な表情を見せてくれる尾瀬。このコンテストは、魅力に満ちた尾瀬を広く紹介し、貴重な尾瀬の自然を見直し、自然保護への関心を高める目的で企画しました。

■応募締切
平成20年11月5日（水）

■応募テーマ
1「風景」の部
魅力に満ちた尾瀬の自然景観をとらえたもの
2「動植物」の部
尾瀬に住む動物や植物の自然な営みをとらえたもの
3「人」の部
尾瀬を舞台にした、人や家族・グループなどのふれあいをとらえたもの
4「保護」の部
尾瀬の抱える環境問題、積極的な保護活動の様子など、自然保護の視点から尾瀬をとらえたもの

〈お問い合わせ先〉
NHK「わたしの尾瀬」実行委員会事務局
(財)尾瀬保護財団内
☎027－220－4431
※応募要項など詳細は、財団ホームページなどをご覧ください。

寄付のお願い

尾瀬保護財団では広く寄付をお願いしております。

当財団は、尾瀬において、利用者に対し自然への理解を深めるための解説活動や、適正な利用に関する普及啓発を実施するとともに、各種の環境保全対策や施設の管理運営等を実施し、尾瀬の優れた自然環境の保全に努めています。

■企業・団体の皆様とより良いパートナーシップを築けるよう、下記の制度があります。

種　類	条　件	特　典
特別協賛寄付	３年に渡る毎年30万円以上の寄付、または一時の100万円以上の寄付	①財団機関誌、財団ホームページに企業等名称、ロゴマーク、メッセージを１年間掲載 ②尾瀬国立公園ロゴマークの取扱要領に基づき使用申請ができ、許可後は無償で１年間使用
協　賛　寄　付	３年に渡る毎年10万円以上30万円未満の寄付、または一時の30万円以上100万円未満の寄付	①財団機関誌、財団ホームページに企業等名称を１年間掲載

■寄付をいただいた皆様にこの財団機関誌「はるかな尾瀬」を所定の期間お送りします。
■尾瀬保護財団は「特定公益増進法人」に指定されており、当財団への寄付は税の優遇措置を受けられます。
■寄付につきましては、財団事務局（群馬県庁17階・027-220-4431）に御来訪いただくか、財団に御連絡をいただいた上、右の口座にお振込をお願いいたします。

福島県	東邦銀行県庁支店	普通	1078095
	福島銀行本店営業部	普通	0590088
	大東銀行福島支店	普通	1287138
群馬県	群馬銀行県庁支店	普通	0515428
	東和銀行本店営業部	普通	0975531
新潟県	第四銀行県庁支店	普通	1182791
	北越銀行県庁支店	普通	0199366
	大光銀行新潟支店	普通	0837334

特別協賛寄付者の御紹介

※五十音順、敬称略

株式会社群馬銀行
尾瀬紀行（信託ファンド）で収受した信託報酬の一部として152万円余りを御寄付いただきました(2008年６月９日)。昨年に続き、今回が２回目のご寄付となります。
寄付者からのメッセージ：信託報酬の一部が尾瀬保護財団への寄付となる仕組みの投資信託を取扱っており、多くのお客さまの善意の集大成を寄付させて頂きました。趣旨にご賛同頂き投資信託をご購入頂いた全てのお客さまに深く感謝いたします。

ＤＩＡＭアセットマネジメント株式会社
尾瀬紀行（信託ファンド）で収受した信託報酬の一部として443万円余りを御寄付いただきました(2008年６月11日)。昨年に続き、今回が２回目のご寄付となります。
寄付者からのメッセージ：尾瀬の美しく貴重な自然を後世に受け継ぐために今回の寄付金が有効に活用され、環境保全の一助となることを期待しております。DIAMはこれからも金融の仕組みを通じて、社会に貢献する資産運用会社を目指します。

株式会社第四銀行
尾瀬紀行（信託ファンド）で収受した信託報酬の一部として115万円余りを御寄付いただきました(2008年６月11日)。昨年に続き、今回が２回目のご寄付となります。
寄付者からのメッセージ：尾瀬の自然環境を後世まで末永く守り続けるため、今回の寄付金が有効に活用されることを期待しております。第四銀行はこれからも尾瀬の自然環境保護を支援すると共に、地域社会の発展に貢献してまいります。

株式会社東邦銀行
尾瀬紀行（信託ファンド）で収受した信託報酬の一部として137万円余りを御寄付いただきました(2008年６月６日)。昨年に続き、今回が２回目のご寄付となります。

利根郡信用金庫
尾瀬国立公園誕生記念定期預金「尾瀬のなかま」より284万円余りを御寄付いただきました。(2008年５月２日)
寄付者からのメッセージ：今回の寄付金が尾瀬の優れた自然環境の保全に有効に活用されることを期待しております。お預け入れいただいた多くのお客様におかれましては、地域の自然環境保護に対し、ご理解、ご支援いただきまして誠にありがとうございました。

新潟証券株式会社
尾瀬紀行（信託ファンド）で収受した信託報酬の一部として37万円余りを御寄付いただきました(2008年６月11日)。昨年に続き、今回が２回目のご寄付となります。
寄付者からのメッセージ：尾瀬の自然環境を後世まで末永く守り続けるために今回の寄付金が有効に活用されることを期待しております。新潟証券は第四銀行グループとして、これからも尾瀬の自然環境保護を支援すると共に、地域社会の発展に貢献してまいります。

社団法人日本損害保険代理業協会

尾瀬国立公園記念式典とPRイベントで使ってほしいということで100万円の御寄付をいただきました。(2007年9月18日)
また、地球環境保護活動の一環として設立されたグリーン基金より尾瀬の自然保護の支援として平成20年度から5年間、毎年20万円のご寄付をいただくことになりました。(2008年6月27日初回)。
寄付者からのメッセージ：本会は、植林活動や自然保護活動に実績のある団体を支援するための基金を設置し、寄付を行っています。大変美しい尾瀬の保護活動を支援するため、財団法人尾瀬保護財団が尾瀬国立公園記念事業として行う記念式典＆記念ＰＲイベントへの協賛団体として、寄付させていただきました。

サンダース・ペリー化粧品製造元　株式会社ネイチャーズウェイ

化粧品１本に付き３円を積み立てきた基金より100万円の御寄付をいただきました。(2008年５月19日)
寄付者からのメッセージ：当社は創業35周年を向かえました。「３円から始まる環境保護活動」として、はじめは小さな一歩ですが私たちの活動を見守っていただいている多くのお客様のご支持を得て、大きな活動に育てていきたいと願っています。

協賛寄付者の御紹介

※五十音順、敬称略

尾瀬山小屋組合

尾瀬保護財団設立当初から毎年、御寄付をいただいております。今回は22万円余りを御寄付いただきました(2007年12月11日)

共和工業株式会社

尾瀬保護財団の活動に賛同いただき、今回の御寄付を含め３年間、毎年10万円の御寄付の申込をいただきました。(新潟県三条市　2008年５月22日)

群馬県庁福利厚生事務協力会

財団の活動に対し、50万円の寄付金をいただきました。(2007年10月31日)

株式会社　ロッテ

平成13年より毎年20万円の御寄付をいただいています。今年も御寄付をいただきました。(2008年２月29日)

協賛寄付者(機材)の御紹介

※五十音順、敬称略

キヤノン株式会社

ビジターセンター、財団事務局での情報収集用としてデジタルカメラ７台とハイビジョン・デジタルビデオカメラ３台、およびその他付属機材を御寄付いただきました。(2007年９月)

パタゴニア日本支社

春先、晩秋のビジターセンター職員の活動用、冬季の除雪作業用としてダウンジャケット、ダウンセーター計30着を御寄付いただきました。(2007年12月)

その他の寄付

板橋勇人、沖田典明、関越交通株式会社、関本昇、日本エコウォーク環境貢献推進機構、福田久子、(有)写真五色、巻島秀男、吉田和子の皆様から御寄付をいただいております。ありがとうございました（敬称略）。

『友の会』コーナー

「友の会」は豊かな尾瀬の自然を守る財団の活動を支援してくださる方々の集まりです。

年会費

○個人会員……1口　2,000円
○ユース会員(その年度始に22歳以下(1986年4月2日以降に生まれた方))
……1口　1,500円
○家族会員(個人会員と同居の家族)……1口　1,500円
○賛助会員(団体･法人)……1口 10,000円

☆新会員制度について

尾瀬保護財団では新しい会員区分としてユース会員と家族会員をはじめました。是非、ご活用ください。
ユース会員の特典は個人会員と同じです。家族会員は会員証、バッチは会員数分お送りしますが、機関誌・ガイド類は一家庭分取りまとめて１冊お送りします。お友達、ご家族にも是非、「友の会」をご紹介ください。
※賛助会員の特典は平成20年度から機関誌のみとなりましたのでご了承ください。

☆卓上カレンダー配布の廃止について

卓上カレンダーについては平成20年度より配布がなくなりました。なお、通信販売は例年通り行う予定です（友の会会員の割引もあります）。

☆平成20年度新規加入の方への会員バッチの送付について

お待たせしました。平成20年度の新規会員の方にお送りしています。

☆メールクラブのご案内

「友の会」会員を対象に、登録をいただいた方に尾瀬の「旬な情報」をメールにてお送りする「めーるクラブ」を行っています。是非、ご利用ください！！（登録は財団ホームページから）

お詫びと訂正

前号（vol.５）３ページのリレーエッセイに誤記がありました。お詫びし訂正いたします。

○３ページ上段12行目
誤　1977年
正　1997年

編集後記

先日、鳩待峠で多くのちびっこが、元気よく、準備運動をしている光景を見かけました。今年も、残念ながら、尾瀬をトレッキング中にケガをされる方が多くいらっしゃいます。しっかりした「装備」と、十分な「準備運動」を行った上で、尾瀬を楽しんでください。(小)

みんなの尾瀬を
みんなで守り
みんなで楽しむ

「尾瀬ビジョン」基本理念

はるかな尾瀬

財団法人 尾瀬保護財団機関誌
2008.09 平成20年9月1日発行
発行所:財団法人 尾瀬保護財団

〒371-8570 群馬県前橋市大手町1-1-1
TEL.027-220-4431／FAX.027-220-4421
E-mail info@oze-fnd.or.jp ホームページアドレス http://www.oze-fnd.or.jp

本誌は、尾瀬の木道をリサイクルした再生紙と環境にやさしい再生植物油インキを使用しています。